

郷土室だより

第133号

平成21年2月16日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 20-029

「vari ゆく都市像」(12)

市場原理というもの

◇五百二十三年前の江戸湊

この項は前号の「太田道灌の銭遣い」の続きで、道灌が城内の自分の書斎静勝軒に飾る詩板を洛・湘（京都・鎌倉）の臨濟宗の大寺の長老クラスの僧に注文して出来た『寄題江戸城静勝軒詩序』という漢詩集の一部紹介である（全文は『江戸名所図会』の最初に楷書で掲げられているからご覧になれることをお勧めする）。ここでは文明八（一四七六）年当時の江戸湊の状況を描写した漢詩文の部分を意識して読み下したものである。

城の東畔に河有り、その流れ曲折して南海に入る。大小の商船の風帆をはじめ夜は漁船の篝火が、竹樹烟雲の際に隠見出没す【江戸前島を隔ててチラチラと見え】。高橋の下に到りて纜を繫ぎ權を擱きて、鱗集蚊合し、日中市を成せり。則ち房の米、常の茶、信の銅、越の竹箭、相の旗旌騎卒、泉の珠犀異香、塩魚、漆棠、扨筋、膠栗餌、梔茜、筋膠の衆に至るまで、彙聚し區別する者なく、人の頼るところなり。

舍者	與公	缺於	躁	泉	竹	常	日	矣	室	餌	之	合	出	而	其	背	月	凡	萬	斯	物
雪也	公之	非一	能	之	箭	之	々	愿	收	之	旗	日	没	南	叢	曛	之	三	狀	遊	耳
泊其	相以	盈偏	勝	之	相	茶	成	其	天	衆	旌	々	於	入	可	兮	皎	焉	拍	斯	以
舩不	爭所	非而	寒	珠	犀	之	信	而	地	無	騎	成	竹	海	蕪	岡	如	東	几	則	故
者知	而守	冲非	而	犀	之	信	市	而	人	不	卒	市	樹	商	者	巒	者	瀛	可	一	軒
浣焉	相扁	而後	不	異	旗	之	則	失	以	彙	泉	則	烟	旅	地	紫	天	宸	翫	日	之
花者	戰於	軒無	勝	苑	銅	房	之	常	爲	聚	之	房	雲	之	小	所	而	之	霞	若	早
老咸	者軒	未不	唯	騎	越	之	米	矣	吾	區	珠	之	際	之	獻	腴	與	絢	互	晚	靜
人謂	蜀公	之	泊	卒	之	米		社	有	別	犀	米	際	之	獻	腴	與	絢	互	晚	靜
蜀公	之	起	不					戶	避	者	異	常	到	風	也	田	也	如	出	之	勝

『江戸名所図会』（齋藤月岑編者）「江亭記」の一部とその拡大

つまり【日比谷入江に集まってき

た多くの船が鱗集蚊合し、毎日市を成【したといひ、それらの船は房州から米、常陸から茶【この時点での「常の茶」の存在も注目すべき産物である【信濃から銅【鉱産物を代表する【、越後からの矢

竹、相模からは旗指物を持った騎馬武者や兵隊、泉州からの寶石類・高貴葉・工芸用のウルシ・ニカワ・染料など【この場合は和泉ではなく、その品目から中国福建省の泉州である可能性が大きい】である。越後と相模の《商品》は矢玉の供給と前号で見た傭兵隊要員の輸出港であったことを物語る。

この時期の傭兵隊は国内はもちろん海外にも盛大に需要があった。福建省沿岸をはじめ東南アジア全域はいわゆる「和寇」の活躍した地域であり、東国の江戸湊はその要員の供給地だったのである。当時も現在も船舶による貿易には「片道輸送」は船舶の航海安全上成立し得ないことだから、泉州からの多様な品物と傭兵のバーター取引が在ったことが推察される。【一】内は筆者の補注)

◇市場災害の影響

十五世紀後半の太田道灌の銭遣い状況の紹介に終わった前号の原稿を京橋図書館の事務室に送った時は、〇八年の十月初めのことだった。

その一週間前の地球規模の大ニユースは米国の証券大手のリーマン・ブラザーズの破綻報道であり、次いで保険大手のアメリカーン・インターナショナル・グループ(AIG)も同様の状態になったことが報じられ、さらに大手自動車会社の危機報道が追い討ちをかけた。

息継ぐ間もなく九月二十九日にはダウ平均は激しく下落して、過去最大の下げ幅の七七七ドル安となり、十月九日には八五七九ドルと九〇〇ドルを割り込んだ。さらに十一月には八〇〇ドルを割って七五五二ドルと一九三一年(昭和六年)以来の、市場三番目の暴落が報道された。いわゆる世界恐慌ではなく世界危機と呼ばれた事態の到来である。

日本の証券市場の相場もこれに従って、目も当てられぬ暴落を迎

えた。すでに〇七年中にメディアの表現によれば「信用力の低い個人住宅向け融資(サブプライムローン)問題」が世界規模の信用収縮をもたらすという警告的情報は、かなりたびたび報道されたことを記憶しているが、どうも当事者や関係者には「それはナイ」と独り決めていたような観があった。

この《事件》の解説には「ファンドや金融工学が煽り立てた金融商品は技術的には信頼できないバブルに過ぎなかった」という説明が早々と出されたのだが、現実の大きな資産収縮の解決には何の役にも立たないものだった。

今度の世界的金融危機のラフなスケッチはこのようなものだが、結論めいた説明の中には「IT(情報技術)やグローバル化」は、生きた人間の息吹を反映しない《工学的市場》の操作の結果だという見方も目に付いた。それは一握りの一億ドルトレーダーの犯罪としてのゲームだという話でもあるというものだ。

《犯罪ゲーム》の《犯罪》にこだわると、つまり言葉の問題として

はプライムとは「優良」を意味する。それにサブが付くと「優良な顧客ではない」という意味に転じて、このように言葉一つを取り上げて、優良な顧客ではない者を対象に巨額のローンを設定して……、その限りでは虚偽ではなく公正性を示しているわけだというのが、どこかの国の《市場原理》であり、その破綻が世界危機なのである。

◇《市場原理》

ここで話題を再び十四世紀の「市場之祭文」(平成二十年二月刊129号掲載)に戻すと、延文六

(一三六二年)年に武州鷲宮で宣言された《市場原理》は、「正直の政を鷲の世といひ、正直の率法を鷲の法と名づけた」という鷲和市場「正直が「いちば」の基本的な原理だということを神仏の前の「市庭」で強調したものであることを思い出していただきたい。

「正直の率法」とはその「市庭」に集まるものすべての基準であり、おおよげ「公」を意味するものであった。

「公」といえば、制度的には国

家・役所・公儀・公私・公務・公事があり、社会的には一般・世間の意味であり、状況としては公安・公開・公共・公平といった状況があり、歴史的には公子・公主・公家（卿）などの別があり、現在は公共・公営・公園・公団・公務員などの《大きな「公」》ばかりが目立つが、古くは「おおよけ」とは大家・大宅という意味で、大きな建物、つまり多数の人々が入りできる建造物を意味したという。これが先に見た「一般・世間」つまり「公」の意味に転じた言葉なのである。

この関係を別の言葉で言えば「親しき仲にも礼儀あり」で、たとえば夫婦親子兄弟の仲でも自ずからなる秩序がある状態を言う。これは同業・同職の人相互にも正直を理念とする基本的人権を尊重するという「場」が「おおよけ」であった。

この「おおよけ」の場で商売上の競争のルールを確立したのが「いちば」にはほかならない。それは子供の遊びの《じゃんけん》といったゲームのルールも、その「場」での立派な「おおよけ」なのだといえれば説明としては十分であろう。

場面を変えてシエークスピアの「ベニスの商人」の機智と警句に満ちたやり取りを読んでも「商売の基本的ルール」がきちんと述べられてるように、洋の東西、異なる文化をもつ人々の関係においても「商売の基本的ルール」である正直＝真実は互いに容認されてはじめて成立する。その容認が不成立の場合には「いちば」も成立し得ないのである。

現在では企業を持つ「人々」の大部分が「法人」である。逆に言えば会社で代表される企業はその社会の法律によって人格を与えられた存在である。そのことを前提に企業は市場に参加しているのである。

グローバル化した地球上の市場で、資本の蓄積の大きい企業が《力任せに》「おおよけ」意識の必要性を持たずに行動した《金融工学的市場原理？》の強さが、もろくも破綻したのが最近の経済事情なのである。

人間の息遣いそのままに《手槍》・《指値》で《現物》取引していた「いちば」が、「IT（情報技術）」の急激な発達の前に壊滅したのが、今度の金融災害、転じて大不景気だとしたら、今後の「IT」技術をどのようコントロールすべきかをなんらかの形で提案しなければならぬはずだが、どうもそのような風は感じられない。

◇《魏志倭人伝》

二世紀から三世紀にかけての日本列島の状況を、あの三国志の一国である魏帝国が「地誌」として記録したものが『魏志倭人伝』である。それには北九州を中心とした列島の事情が克明に描かれる。女王卑弥呼、その「くに」邪馬台国、そしてそれらの存在を立証した「埋もれた金印」の発見の再確認などをはじめ、敗戦後の日本史は『魏志倭人伝』の研究から始まったといってもよい状況が長く続いている。

現在でも邪馬台国の場所について、相次ぐ考古学上の大発見を踏まえて北九州説と畿内説の論争が続く。そうした論争は祭祀道具の分布・古墳の形式の変遷などを中心に、目を見張るほど精密・細緻に繰り広げられている。

さらに昭和四十三年に畿内を遠く離れた武蔵国の稲荷山古墳（埼玉県行田市）から、雄略天皇の实在を証明する文字が発掘された鉄剣の銘により確認された。その銘の文字は計一五文字、雄略天皇を意味する獲加多支鹵大王と辛亥年七月四十七一年で主人公と年代が確認されたのである。

個人的感想になるのだが、その約十年前から考古学者の和島誠一氏と発掘・出土した鉄製品の産出地を確認するために、その材料の稀元素の存在を分光スペクトル撮影する仕事に関わった経験は、鉄の個性の追求はわが青春の一時期を思い出させるものでもあった。

話題を戻すと、ササノオの命が八岐大蛇の尾から取り出して、天照大神に献上した剣、天叢雲剣（のち草薙の剣と改称）の材質は青銅だったのか、鉄だったのかという疑問に古書は答えてくれないが、稲荷山古墳出土の「鉄」剣の場合には、X線照射で事実が明らかになったのである。

これを弾みに朝鮮半島の東南端にあった任那国（最近は加羅と呼ばれるほうが多い）と倭との間の鉄の流通が研究の対象に取り上げられるようになり、古代の加羅と倭諸国との関係の実態が再検討されてきたのであるが、その目で『魏志倭人伝』を見ると、「市」が存在したことに気が付いた。

難解な『魏志倭人伝』を意識的に読んでゆくと、朝鮮半島の帯方郡を出発してから対馬海峡を渡って北九州の「伊都国」に着く。そこから「南水行二十日」の距離にある邪馬台国にいたる行程の説明の中に「(前略) 尊卑各々差序有り、相臣服するに足る。租賦を収む、邸閭有り、国国市有り。有無を交易し、大倭をして之を監せしむ。」という記事がある。そしてさらに南に進むと「邪馬台国に至る」とあり、それに続く叙述に「女王卑弥呼の名と、それを囲む風俗や制度的な事柄の観察が続く。それはヒミコの時代にすでに租税制度やそれを収納する「邸閭」があったり、「国国市有り」そこで「有無を交易」していたとする。それだけではなく「大倭」がそうし

た流通を「監せしむ」監督する」という具合であった。

注 『魏志倭人伝』について

ここに引用した『魏志倭人伝』は『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・随書倭国伝』（和田清・石原道博編訳・昭和二十六年・岩波文庫）より引用した。発刊と同時に買い込んだ私の五十七年来の愛読書である。本文の中で述べたように『魏志倭人伝』には多彩な読み方がある。その「読み」を越えて考古学の新発見が加えられ続けた。もちろんそうした検討は、朝鮮古代史の研究と共にまだまだ続行中である。

ここではそのような活発な研究に飛びつかずに、あえて「古典」を静かに読み返しているうちに、この「郷土室(たより)」「変り行く都市像」シリーズの主題である「いちば」に関連するものとして「国国市有り」の箇所が気がついた。その気になって僅か一八ページの文庫本を再三再四読み返してみただけで、新しい発見が何箇所かあるのである。

それはさておき、今度の《金融危機》の発端になった場所での《市場原理》の実態が明らかになるにつれて、愛読する古典の「国国市有り」とその前後の記述に限っても、私をはじめからこのシリーズの芯にしようとした事柄にピタリだと思われる箇所が多くあるので、予定を変えてこのような形で引用してみた。

この『魏志倭人伝』の時代よりもさらに四世紀以上時代が下る中国の唐代の「市」の場合は、官僚が皇帝から実物給与された物品を日用品と交換する施設が「市」だったという解釈もあり、そのためにも「市」は首都の重要な都市施設だったというが、それは『魏志倭人伝』に描かれた「倭」の時代でもすでに見られたものであった。さらに時代を飛躍させれば前号(第131号)で取り上げたような、十六世紀の日本の封建領主が《許可》した「楽市楽座」と同じ型の市場が、邪馬台国時代にはすでに「国国市有り」という状況に在ったとも読める実態があった

ことにもなる。これは私にとつて新しい発見であった。つまり「いちば」はその社会の状況に依じて、絶えず変化するのであるという非常に当たり前の結論である。「正直の率法」市庭の神仏の前には自由平等を原理とする「いちば」と、「いちば」の有利性を確保するために封建領主が庇護した「楽市楽座」の市場とでは、一卵性双生児と二卵性双生児との違い以上に大きな差異があるのである。

この「目」で世界を見ると、「いちば」の利便性とその中立性は時代と場所に限らず、その環境市場原理のあり方によって、中世の自然発生的「いちば」も現代のグローバル化した証券市場も、その規模や施設とは無関係に市場機能が簡単に崩壊したり、移動したりする。資本主義市場においてモノが無限に、絶え間なく生産され続け、流通し、消費されるという幻想は、今度の金融危機を機会にきれいさっぱりと清算したほうが、この有限なる地球の将来のためにも最善に近い道だと思われる。